

## 9. 温胆湯

参考文献名	半夏	茯苓	生姜	乾生姜	陳皮	竹茹	枳実	甘草	黄連	酸棗仁	大棗	乾姜	枳殼
処方分量集	6	6	-	1	2.5	2	1	1	1	1~2	-	-	-
診療の実際	6	6	3	-	2.5	2	1.5	1	-	-	-	-	-
診療医典 注1	6	6	3	-	2.5	2	1.5	1	-	-	-	-	-
症候別治療 注2	4	4	3	-	2	2	1.5	1	-	-	-	-	-
処方解説 注3	6	6	-	1	3	2	1	1	1	1~3	-	-	-
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方百話 注4	6	6	-	1	3	2	-	1	1	1	-	-	1
応用の実際 注5	5	4	-	2	3	3	2	2	-	-	2	-	-
明解処方 注6	4	4	1.5	-	2	2	1.5	1	-	-	-	-	-
漢方大医典 注7	6	6	3	-	2.5	2	1.5	1	1	3	-	-	-
近代漢方薬ハンドブック 注8	6	6	-	1	3	2	1	1	1	1~3	-	-	-
漢方診療三十年 注9	6	6	3	-	2.5	2	1.5	1	-	-	-	-	-
臨床医の漢方 注10	6	6	-	-	2.5	2	1.5	1	-	-	-	1	-

注1 弛緩性体質で胃下垂やアトニー症のあるものの不眠症，驚悸症，心悸亢進症，気うつ症。

注2 大病後疲れて眠れないもの，驚悸症，気鬱。

注3 弛緩性体質で胃下垂症や胃アトニー症のある虚証の不眠症，驚悸症，心悸亢進症，気鬱症。

注4 胃障害による不眠症。

注5 胃腸虚弱，胃アトニー，胃下垂，大熱・大病後の胃腸の機能の衰えた人の元気回復，驚悸症，胸さわぎ，動悸，憂鬱，不眠症，食欲不振，嘔き気，乾嘔。

注6 虚煩による不眠症，精神不安。

注7 病後，胃の機能が衰え，みぞおちで振水音を認めるものの不眠症。

注8 胃の虚弱者の不眠症，心悸亢進症，驚悸症，気鬱症。

注9 胃障害のあるものの不眠症。

注10 不眠症，気鬱。

参考：処方解説では，三因方を出典とし9生薬よりなる薬方を温胆湯としている。

処方分量集，漢方百話，漢方大医典では温胆湯加味方として取扱っている。

また，応用の実際，明解処方は，出典を千金方とし黄連，酸棗仁，大棗を削除している。

処方番号：9A

処方名：加味温胆湯（かみうんたんとう）

**処方構成：**

半夏 4-6、茯苓 4-6、陳皮 2-3、竹茹 2-3、生姜 1-2、枳実 1-2、甘草 1-2、遠志 2、玄参 2、人参 2、地黄 2、酸棗仁 2、大棗 2

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力中等度あるいはそれ以下で胃腸が虚弱なものの次の諸症

**効能・効果：**

神経症、不眠症

原典：万病回春

出典：医療衆方規矩

**解説：**

本方は温胆湯の加味方であるが、『千金方』、『万病回春』、『古今医鑑』等類似方があつて、それをそれぞれひきついでいるため現代の成方には著者によって、同名で構成内容が若干異なる処方が記載されている。

温胆湯に比較して、神経症状の激変しやすいものによく、とくに慢性病や大病のあと衰弱して眠れなくなったのを治す効果にすぐれている。

## 9A.加味温胆湯

参考文献名		半夏	茯苓	陳皮	竹茹	乾生姜	枳実	甘草	遠志	玄参	人參	地黄	酸棗仁	大棗	生姜	黄連
処方分量集	注1	3.5	3.5	-	3	1	3	2	-	-	3	2	3.5	-	-	2
診療の実際		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
診療医典		6	6	2.5	2	-	1.5	1	-	-	-	-	2~5	-	3	1.5
症候別治療	注2	4	4	2	2	-	1.5	1	-	-	-	-	5	-	3	1.5
処方解説		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
後世要方解説		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方百話	注3	6	6	3	2	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-	1
応用の実際	注4	5	4	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	-	-
明解処方		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

〔注1〕 上記の生薬に麦門冬3.0，当帰・山梔子各2.0，辰砂1.0が加味された万病回春の処方が記載されている。

〔注2〕 不眠。

〔注3〕 胃障害による不眠症。

〔注4〕 神経症，不眠症，胃下垂症，胃アトニー症，大病後の衰弱による虚煩。

参考：類似の加味方として，万病回春に竹筴温胆湯\*（柴胡5.0，桔梗，陳皮，半夏，竹筴，茯苓各3.0，香附子，人參，黄連各2.0，枳実，甘草，乾生姜各1.0）

千金方に千金温胆湯\*（半夏5.0，陳皮3.0，甘草，竹筴各2.0，乾生姜各1.0）

古今医鑑に清心温胆湯\*（半夏，茯苓，陳皮，白朮各3.0，当帰，川芎，芍薬，麦門，遠志，人參，竹筴各2.0，黄連，枳実，香附，菖蒲，甘草各1.0）などがある。

\* 矢数道明「処方解説」

処方番号：9B

処方名：竹茹温胆湯（ちくじょうたんとう）

処方構成：

柴胡 3-5、竹茹 3、茯苓 3、麦門冬 3-4、陳皮 2-3、枳実 1-2、黄連 1-2、甘草 1、半夏 3-5、香附子 2、生姜 1、桔梗 2-3、人参 1-2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度のものの次の諸症

効能・効果：

かぜ、インフルエンザ、肺炎などの回復期に熱が長びいたり、また平熱になっても、気分がさっぱりせず、せきやたんが多くて安眠が出来ないもの

原典：万病回春

出典：寿世保元

解説：

本方は『金匱要略』の小半夏加茯苓湯をその基源に仰ぎ、『和剂局方』の二陳湯、『三因方』の温胆湯を経て改良された方剤といわれる。その進化の後を表示すれば下のようである。（矢数道明：『漢方処方解説』を引用す）

方薬名	生薬名	半	茯	生	陳	甘	竹	枳	黄	酸	柴	桔	香	人	麦
		夏	苓	（乾 姜）	皮	草	茹	実	連	棗 仁	胡	梗	附 子	参	門 冬
小半夏加茯苓湯 *1		8	5	5 (1.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
二陳湯 *2		5	5	3 (1)	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
温胆湯 *3		6	6	—(1)	3	1	2	1	1	1~3	—	—	—	—	—
竹茹温胆湯 *4		3	3	—(1)	3	1	3	1	2	—	5	3	2	2	—

\*1 金匱要略 \*2 和剂局方 \*3 三因方 \*4 万病回春の方薬である。

なお、二陳湯に用いる半夏と陳皮は陳久のものを尊ぶことから、この方薬名を得ている故、これら関連処方に供用する半夏と陳皮は新しいものより古いものを用うべきである。

元来、これらの方剤は胃内停水によって嘔吐、悪心を発するものに用いる。竹茹は胃の熱を消し、かつ鎮静的に作用し、枳実のみぞおちのつかえを去り不安感を鎮める。黄連、酸棗仁、人参は神経の亢奮をさらに鎮静する。それに竹茹、桔梗などは祛痰作用がある。

9B.竹茹温胆湯

参考文献名		柴胡	竹茹	茯苓	麦門冬	生姜	乾姜	半夏	香附子	桔梗	陳皮	枳実	黄連	甘草	人参
診療医典	注1	3	3	3	3	3	-	5	2	2	2	2	1	1	1
治療の実際		3	3	3	4	3	-	5	2	2	2	2	1	1	1
処方解説		5	3	3	-	-	1	3	2	3	3	1	2	1	2
応用の実際	注2	3	3	3	4	2	-	5	2	2	2	2	1	1	1
処方分量集		3	3	3	3	-	1	5	2	2	2	2	1	1	1
漢方処方集		6	3	3	-	-	-	3	2.5	3	3	3	4.5	1	1.5

〔注1〕 肺炎，感冒，流感の回復期になっても熱がまだ残り，とれても咳と痰がひどく安眠のできないもの。気分のさっぱりしないもの，夢をみて神経過敏のものに用いる。

〔注2〕 感冒が長びいて咳がひどく，気分がさっぱりせず，よく眠れないもの。また気管支炎，肺炎，神経症，発作性心悸亢進などに用いる。

処方番号：10            処方名：温脾湯（うんぴとう／おんぴとう）

**処方構成：**

大黄 3-4、人参 3、甘草 1（炙甘草も可）、乾姜 2、加工ブシ 2-3

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力中等度以下で疲れやすく冷えやすいものの次の諸症

**効能・効果：**

便秘、腹痛、下痢

**原典：**千金要方

出典：勿誤薬室方函口訣

**解説：**

処方構成は四逆加人参（甘草、乾姜、附子、人参）に大黄が加わったものである。四逆加人参湯は少陰病期～厥陰病期に用いられる方剤で、手足が冷え、悪寒し、下痢をするものに用いる。本方はこれに寒性の生薬である大黄が加えられた特異な方剤である。原典である『千金方』には「治下赤白連年不止、及霍乱脾胃冷寒不消」と記されており、粘血便が年余に亘って持続するものや、急性の吐瀉病で胃腸が冷えて痛むものが目標となる。『勿誤薬室方函口訣』には「此方は温下の極剤とす」とあり、温めつつ下す特異な方剤であることが記されている。

近年、この方剤が慢性腎不全に有効であることが報告されており（三瀧忠道：日腎会誌、29 巻 1987、41 巻 1999）臨床上参考となる知見である。

## 10.温脾湯

参考文献名	大 黄	人 参	甘 草	炙 甘 草	乾 姜	附 子	熟 附 子	党 参	用法・用量
中医処方解説 <span style="float: right;">注1</span>	3	-	-	1	2	-	2	3	*1
中医臨床のための方剤学 (神戸中医学研究会:医歯薬出版)	12	9	-	3	6	9	-	-	
脾胃学の臨床	-	-	-	-	-	-	-	-	

\*1 文献記載の3分の1の分量で記載

### 注1

〔効能〕 温補脾陽・瀉下

〔適応症 陽虚の便秘〕 気力がない・元気がない・疲れやすい・食欲不振・四肢や腹の冷え・寒気・腹痛(冷えると増強し暖めると軽減する)などの症候がみられるもの。舌質は淡白・舌苔は白滑・脈は沈遅で無力。

処方番号：11

処方名：越婢加朮湯（えっぴかじゅつとう）

**処方構成：**

麻黄 4-6、石膏 8-10、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3）、大棗 3-5、甘草 1.5-2、  
白朮 3-4（蒼朮も可）

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力中等度あるいはそれ以上で浮腫（むくみ）があり、口が渇き、汗が出て、尿量が減少する傾向にあるものの次の諸症

**効能・効果：**

浮腫（むくみ）、関節リウマチ、関節炎、湿疹、夜尿症、目の痒み・痛み

原典：金匱要略

出典：

**解説：**

越婢湯に朮が加わった方剤である。すなわち越婢湯の利水作用が強化されている。陽証で実証、水滯を伴う者が適応となる。

原典である『金匱要略』には「一身面目浮腫し、其の脈沈にして小便利せず。」 「厲風氣、脚弱を治す」と記されている。「厲風氣」（れいふうぎ）とは脚氣に類似した病態である。また『医聖方格』には「一身面目浮腫し、小便少なく、渇して汗出で、其の人大便硬く、舌黄なるは、越婢加朮湯之を主る」と口渇が見られることを記している。

実証で、体表の熱は明らかではないが、身体の深部に熱感（伏熱）があり、体表部や関節の浮腫、腫脹、疼痛を示すものが本方の適応となる。

身体深部に熱感があるために、冷水を多飲することになるが（口渇）、それにも拘わらず尿量が減少する。つまり水滯（水毒）の病態である。この水分バランスの失調を修復するのが越婢加朮湯とその類方である。

『EBM漢方』には変形性膝関節症、30症例の症例集積研究（杉山誠一ら）が記されている。



## 11.越婢加朮湯

参考文献名		麻黄	石膏	生姜	乾生姜	甘草	白朮	朮	大棗	用法・用量
漢方診療医典	注1	6	8	3	-	2	-	4	3	
漢方処方応用の実際	注2	6	8	3	-	2	-	3	3	
臨床応用漢方処方解説	注3	6	8	-	1	2	-	4	3	
金匱要略入門		6	8	3	-	2	-	4	4	
経験・漢方処方分量集		6	8	-	1	2	-	4	3	
改定新版漢方処方分量集	注4	6	8	-	1	2	4	-	4	
漢方入門講座 I	注5	6	8	3	-	2	4	-	4	
増補改訂漢方入門講座		6	8	3	-	2	4	-	4	
新撰類聚方		六兩	半斤	三	-	二	四兩	-	五枚	
漢方薬入門		6	8	-	1	2	-	4	3	
漢方あれこれ		6	8	3	-	2	-	4	3	
漢方医学の基礎と臨床		6	8	3	-	2	4	-	4	
現代漢方入門		6	8	3	-	2	-	4	3	
漢方古方要方解説	注6	2.4	3.2	1.2	-	0.8	-	1.6	1.6	*1
古方薬囊		6	8	3	-	2	4	-	5	
漢方精撰百八方		6	8	3	-	2	-	4	3	
成人病の漢方療法		6	8	3	-	2	-	4	3	
1000万人の漢方診断と治療の実際		6	8	3	-	2	-	4	3	
実用漢方療法		6	8	3	-	2	4	-	3	
明解漢方処方集		6	8	-	1	2	-	4	4	
近代漢方薬ハンドブック		6	8	3	-	2	-	4	3	
漢方の基礎と応用		6	8	-	1	2	4	-	3	
漢方の基礎と応用		4	10	3	-	1.5	-	3	3	
図説・東洋医学		4	10	3	-	1.5	-	3	3	

\*1 麻黄2.4 石膏3.2 生姜1.2 甘草0.8 朮1.6 大棗1.6 を一包と為し、水一合二勺を以て、煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す（通常一日二、三回）。

### 注1

本方は越婢湯に朮を加えたもので、浮腫。利尿減少などの著明なものに用いる。そこで本方は腎炎、ネフローゼなどの初期の浮腫、脚気の浮腫、変形性膝関節症、関節リウマチ、急性結膜炎、フリクテン性結膜炎、翼状片、湿疹などに用いられる。

### 注2

〔目標〕 越婢湯の証で小便不利のものと類聚方にある。また用方経権に、風湿により疼痛し屈伸することができず、煩渴（ひどく口渇する）、悪風、小便渋るもの。あるいは水病（水飲、水毒）で、喘咳があり、水をさかんにのみ、小便短少（出が悪く）悪寒のするもの。あるいは、脚膝腫痛して鶴膝風（膝関節炎）といわれるようなものにみなよいとある。内科秘録には、急に発病した表水（体表にある水毒）で、悪風、微熱、脈浮数、あるいは口渇のあるものは越婢加朮湯がよいとある。

〔説明〕 越婢加朮湯の目標は、以上のように越婢湯そのものの目標と大差がない。そこでその違いは、朮の薬効から考えなければならない。朮の作用は水分の停滞を去り、利尿を増し、四肢や関節の痛みを止める。そこで越婢加朮湯は、越婢湯証に準じて水分の停滞が甚だしく、浮腫、疼痛、利尿減少のひどいものに用いるのである。しかし、それらの症状の程度の違いは、実際にはなかなか区別できないので、一般には越婢加朮湯がよく用いられる。

〔応用〕 越婢湯の応用に準じるほか、陰囊水腫、目の翼状ぜい片痛風などに用いられることがある。鍼術秘要に、越婢加朮湯は陰囊腫痛して悪寒し、小便不利のものを治すとあり、知新堂方選に、翼状ぜい片と思われる場合の初期に奇効ありとあり、類聚方広義には眼球がはれて熱く痛むもの、眼瞼のはれるものやただれるものによいとある。

注3

本方は主として腎臓炎・皮膚病性腎炎・ネフローゼ・心臓不全・脚気・その他浮腫・関節リュウマチ・眼疾患で充血・疼痛・搔痒・糜爛があつて、すべて分泌物多く醜く見えるもの、急性結膜炎・フリクテン性結膜炎等に用いる。また湿疹・たむし・疥癬・水虫・癰疽・皮下膿瘍・筋炎・瘰癧・潰瘍・脚弱・下肢麻痺・膝に力がなく倒れそうになるものなどに应用される。さらに紅肢症・下肢静脈拡張症(バリックス病)・贅肉・ポリープ・ケロイド・夜尿症・黄疸・バセドー病・翼状片・変形性膝関節症などに広範囲に転用される

注4

〔目標〕 肉極、汗又は体表の分泌過多、脚弱、或は浮腫、小便不利、脉沈

〔応用〕 実証の急性慢性腎炎、ネフローゼ、脚気、浮腫、を伴う疾患、下肢麻痺、化膿症、潰瘍、水虫、湿疹、皮膚病、関節リュウマチ、結膜炎

注5

〔主効〕 浮腫、尿量減少、或は発汗或は発熱、或は脚弱を治す。

〔脉〕 沈緊

〔応用〕 急性腎炎、ネフローゼ、脚気、湿疹、たむし、水虫、急性結膜炎

注6

〔応用〕 1) 水腫性脚気にして、歩行時下肢に倦怠、痿弱、疲労感あり、頭重、口渴し、屢汗出で、下脚浮腫し、知覚鈍麻等ある証。

2) 半身不随等にして、手足の屈伸自由ならず、尿利著しく減少し、自汗あり、渴して頻りに水を欲する証。

3) 関節「ロイマチス」等。

4) 急性腎炎、及び其の類似疾患。

5) 皮膚病性腎炎等。

6) 諸種の皮膚病、殊に疥癬等。

処方番号：11A

処方名：越婢加朮附湯（えっぴかじゅつぶとう）

**処方構成：**

麻黄 4-6、石膏 8-10、白朮 3-4（蒼朮も可）、加エブシ 0.3-1、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 3）、甘草 1.5-2、大棗 3-4

**用法・用量：**

湯

**しばり：**

体力中等度あるいはそれ以上で、浮腫（むくみ）があり、口が渇き、汗が出て、尿量が減少し、ときに悪寒するものの次の諸症

**効能・効果：**

浮腫（むくみ）、関節リウマチ、関節痛、筋肉痛、湿疹、夜尿症、目の痒み・痛み

原典：千金要方

出典：

**解説：**

越婢加朮湯に、さらに附子を加わった方剤である。すなわち、越婢加朮湯に類似の病態で、さらに新陳代謝の低下、冷え、疼痛の強いものが本方の適応となる。

『類聚方広義』には、「此の方（越婢加朮湯）に附子を加えて越婢加朮附湯と名づけ、水腫し、身熱し、渇して小便不利する者を治す。」と記されている。また、『勿誤藥室方函口訣』には「千金に附子を加えて脚弱を治するも、風湿の邪の為に脚弱する者にて、即今の脚氣痿弱なり。」と記されている。「千金」は医書『千金方』のことで、中国・唐代から越婢湯に附子を加えた方剤が臨床応用されていたことが分かる。

### 11A 越婢加朮附湯

参考文献名	麻黄	石膏	白朮	朮	大附子	附子	白川附子	生姜	乾生姜	甘草	大棗	用法・用量
漢方処方応用の実際 注1	4	10	-	3	-	1	-	-	-	1.5	3	
改訂新版漢方処方集	6	8	4	-	-	1	-	-	-	2	4	
漢方入門講座(1) 注2	6	8	4	-	-	-	1	-	-	2	4	
新古方薬囊	六両	半升	四両	-	-	一枚	-	-	-	二両	十五枚	
漢方精撰百八方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
実用漢方療法	6	8	4	-	-	0.3-1	-	-	-	2	3	

#### 注1

〔目標〕 水腫(浮腫)があり、身体に熱感と悪寒があり、関節が重く痛み、口渇、小便不利のもの(類聚方広義)、あるいは水腫や脚気で、肌に熱があり、大便秘結し、口渇、乾燥、麻痺などがあるものは越婢加朮湯で、それに下に白苔を生じて悪寒するものは附子を加える。

#### 注2

顔面浮腫、発熱、小便頻数、寝小便を伴う角膜フリクテン  
 〔応用〕 麻痺性脚気、筋肉リュウマチ、鼻茸、眼疾等。

処方番号：11B

処方名：桂枝越婢湯（けいしえっぴとう）

**処方構成：**

桂枝 4、芍薬 4、甘草 2、麻黄 5、生姜 2.5、大棗 3、石膏 8、蒼朮 4、加工ブシ 1

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度か、やや虚弱なもの次の諸症

**効能・効果：**

関節痛、関節の腫脹

原典：和漢治療要解（鵜飼禮堂著）「京都 大正医報社 大正五年発行」

出典：「越婢加朮湯と桂枝越婢湯の話」（細野史郎）漢方の臨床誌 25(11)

**解説：**

これは越婢加朮湯の加味方で、桂枝二越婢一湯から生姜を去り、白朮を蒼朮に変え附子を加えたものである。『和漢薬治療要解』（鵜飼禮堂）の樓麻質斯（関節リウマチ）の項に桂枝越婢湯加烏頭蒼朮の名前で記載されている。

出典の処方内容は、桂枝 1.0、芍薬 2.5、大棗 2.0、麻黄 1.0、蒼朮 1.5、烏頭 0.3、石膏 2.0、甘草 0.8 であるが、細野は処方中の烏頭を附子に変え、個々の生薬の分量も浅田流漢方の常用量に変換し、処方名を桂枝越婢湯と単純にしたものである。細野史郎は関節リウマチや痛風の第一選択薬としている。また、関節リウマチや痛風の他に、広く関節の腫脹・疼痛を来す場合に応用される。

虚実では越婢加朮湯と桂枝二越婢一湯の間に位置するが、附子が配剤されていることから、冷えや、寒冷による症状の悪化など、陰証の所見を伴う者を目標とするとよい。

11B.桂枝越婢湯

参考文献名	桂枝	芍薬	甘草	生姜	乾生姜	大棗	麻黄	石膏	蒼朮	朮	烏頭	附子	用法・用量
和漢治療要解	1	2.5	0.8	-	-	2	1	2	1.5	-	0.3	-	
漢方の臨床誌	4	4	2	2.5	-	3	5	8	4	-	-	1	

処方番号：110

処方名：桂枝二越婢一湯（けいしにえっぴいっとう／けいしにえっぴいちとう）

**処方構成：**

桂枝 0.75-3.5、芍薬 0.75-3.5、麻黄 0.75-3.5、甘草 0.75-3.5、大棗 1-4、石膏 1-8、  
生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 2.8-3.5）

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力中等度か、やや虚弱で、口が渴き汗が出るものの次の諸症

**効能・効果：**

感冒、頭痛、腰痛、筋肉痛、関節痛

**原典：傷寒論**

**出典：**

**解説：**

この方剤はその名のとおり、桂枝湯と越婢湯を2対1の割合で組み合わせた合剤である。したがって、陽証で、虚実はやや虚証の者が適応となる。

原典である『傷寒論』には「太陽病、発熱悪寒し、熱多く寒少なし」と記され、感冒の初期で、赤ら顔をし、頭痛・発熱・悪寒のある病態を目標とすることが示されている。

『方極附言』に「桂枝湯証多く、越婢湯証少なき者を治す。」と記されている。『類聚方広義』には「風湿、痛風の初起寒熱休作し、或いは攣痛し、或いは走注して腫起する者は此の方を以て汗を発し、後加朮附湯を与うべし。」と記されており、本方が感冒の初期ばかりでなく、広く関節痛や筋肉の攣縮、（移動性）関節炎に応用出来ることが示されている。また類方である越婢加朮附湯は本方による治療を経た後に、選択される方剤であることも記されている。

### 11C.桂枝二越婢一湯

参考文献名	桂 枝	芍 薬	麻 黄	甘 草	大 棗	生 姜	石 膏	用法・用量
漢方診療医典	2.5	2.5	2.5	2.5	3	3.5	3	
傷寒論梗概	1.8	1.8	1.8	1.8	2.4	2.8	2.4	*1
新版漢方医学<創元医学新書>	2.5	2.5	2.5	2.5	3	3.5	3	*2
経験・漢方処方分量集	2.5	2.5	2.5	2.5	3.0	3.5	3.0	
漢方入門講座(1)	2.5	2.5	2.5	2.5	3.0	3.5	8.0	
増補改訂漢方入門講座上巻	注1	2.5	2.5	2.5	3.0	3.5	8.0	
現代漢方入門	注2	2.5	2.5	2.5	3	1	3	
漢方古方要方解説	注3	1.8	1.8	1.8	1.8	2.4	2.8	*3
漢方精撰百八方	注4	3.5	3.5	3.5	3.5	4.0	3.0	5.0
成人病の漢方療法		2.5	2.5	2.5	2.5	3	3.5	3
1000万人の漢方診療と治療の実際		2.5	2.5	2.5	2.5	3	1	3
実用漢方療法		2.5	2.5	2.5	2.5	3	3.5	3

\*1 桂枝 芍薬 麻黄 甘草 各1.8 生姜2.8 大棗 石膏 各2.4 を調合し、水約一合五勺を以て、煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する(通常一日二、三回)。

\*2 桂枝 芍薬 麻黄 甘草 各0.75 大棗1.3 生姜1.1 石膏 各1.0以上七味、水500錠を以て先づ麻黄を煮ること一二沸し、濾過して之に残りの諸薬を入れて再び煮て、200錠を取り濾過して100錠を服用せよ。本来は桂枝湯と越婢湯とを各々別に作って、之を二と一との割合に混合して服用したのであるが、今は合して一方とする。

\*3 桂枝 芍薬 甘草 麻黄 各1.8 生姜2.8 大棗 石膏 各2.4七味を一包と為し、水一合五勺を以て煮て、六勺を取り、滓を去りて一回に温服す(通常一日二、三回)。此の方は、桂枝湯と越婢湯との合方と見做すべきものなり。

#### 注1

〔構成〕 之も分量の算定が繁瑣で、原方では桂枝湯四分の一と越婢湯八分の一を合方したものである。

〔運用〕 発熱

#### 注2

急性熱病

#### 注3

〔応用〕 1)頭痛、発熱し、悪風、悪寒し、身疼腰痛し、脈浮にして数、或は舌少しく乾燥する等の証。

2)悪寒、発熱、頭痛久しく止まず、殊に悪寒甚だしく、脈浮大にして数、舌上乾燥し口渴ある等の証。

3)筋肉或は関節疼痛し、少しく浮腫を現はし、脈稍や浮大なる等の証。

4)熱性病にして、45日を経、発斑する等の証。

5)頭痛甚だしく、汗流るるが如く、唇口乾きて渴し、而も悪寒止まずして衣被を重ねんと欲する等の証。

6)「マラリア」様疾患にして、寒熱発作劇しきも、尚ほ其の初期に於ける等の証。

#### 注4

〔目標〕 証には、太陽病、発熱悪寒し、熱多く寒少なきものとある。本方も桂枝二麻黄一湯、桂枝麻黄各半湯に以て、熱と水毒が結ばれて、表の位に鬱するもので、越婢湯の力をかりて効を得ようとするもので、前者より更に病が重い。

〔かんどころ〕 本方は桂枝湯と越婢湯との合方で、桂枝湯証多く、越婢湯証が少ない。これは感冒等の熱性病で、発熱、悪寒し、瘧のような状態にあるものを目標とする。渴があり、発熱状態も強い。



処方番号：11D

処方名：桂枝二越婢一湯加朮附

(けいしにえっぴいっとうかじゅつぶ／けいしにえっぴいちとうかじゅつぶ)

**処方構成：**

桂枝 2.5、芍薬 2.5、甘草 2.5、麻黄 2.5、生姜 1 (ヒネショウガを使用する場合 3.5)、大棗 3、石膏 3、白朮 3-4 (蒼朮も可)、加工ブシ 0.5-1

**用法・用量：**

湯

**しぼり：**

体力やや虚弱で、口が渇き汗が出て、ときに尿量が減少し、手足が冷えるものの次の諸症

**効能・効果：**

関節痛、筋肉痛、頭痛

**原典：傷寒論**

出典：類聚方広義・皇漢医学

**解説：**

桂枝二越婢一湯に朮と附子が加わった方剤である。すなわち、水滯や新陳代謝の低下、疼痛の一層強い者が目標となる。陰証でやや虚証の者に用いる。

『類聚方広義』には「風湿、痛風の初起、寒熱休作し、或いは攣痛し、或いは走注して腫起する者は此の方を以て汗を發し、後加朮附湯を与うべし。」と記されている。ここに言う「痛風」は広く関節痛を意味する。また「走注して」は移動性の関節痛・筋肉痛のことである。すなわち、桂枝二越婢一湯は陽証の方剤、一方、本方は陰証の方剤である。

11D.桂枝二越婢一湯加朮附

参考文献名	桂 枝	芍 薬	甘 草	生 姜	乾 生 姜	大 棗	麻 黄	石 膏	白 朮	朮	附 子	用法・用量
実用漢方療法	2.5	2.5	2.5	3.5	-	3	2.5	3	3	-	0.5~1	
現代漢方入門	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
成人病の漢方療法	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

処方番号：12

処方名：延年半夏湯（えんねんはんげとう）

処方構成：

半夏 4-5、柴胡 2-3、土別甲 3-4、桔梗 3、檳榔子 3、人参 0.8-2、生姜 1-2、枳実 1-2、呉茱萸 0.5-1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度でみぞおちに抵抗感があつて、肩がこり、足が冷えるものの次の諸症

効能・効果：

慢性胃炎、胃痛、食欲不振

原典：外台秘要方

出典：

解説：

慢性の胃疾患から、足が冷え、左肩がこり、左胸下部がうずくようなときに用いる方剤である。

## 12.延年半夏湯

参考文献名		半夏	柴胡	別甲	桔梗	檳榔子	人参	生姜	枳実	呉茱萸
外台秘要 卷十二痲癖	注1	3両	3両 <sup>*1</sup>	3両	2両	14枚	1両	4両	2両	2両
診療医典	注2	5	3	3	3	3	2	1 <sup>*2</sup>	1	1
症候別治療	注3									
応用の実際	注4	3	3	2	2	2	2	2 <sup>*2</sup>	2	2
処方解説	注5	5	3 <sup>*3</sup>	3	3	3	2	1 <sup>*2</sup>	1	0.5~1
続漢方百話	注6	5	3	3	3	3	2 <sup>*4</sup>	1 <sup>*2</sup>	0.5~1	0.5~1
現代入門	注7	5	3	3	3	3	2	1 <sup>*2</sup>	1	1
明解処方	注8	5	3	3	3	3	2	2	1	1
漢方あれこれ		4	5	5	4	4	2	4	2	0.8
処方分量集		5	3	3	3	3	2	3(1 <sup>*2</sup> )	1	1
日本東洋医学会誌9(4),1(1959)	注9	(4	2	4	3	3	1	1.2	2	0.6 <sup>*5</sup> )
		(3.4	2.6 <sup>*6</sup>	4	2	4	1	3	1.6	0.3 <sup>*7</sup> )

\*1 前胡、\*2 乾生姜、\*3 前胡、ただし柴胡でよい、\*4 人参(竹参)、\*5 処方及び分量の記載はないが「処方解説」から引用した、\*6 唐柴胡、\*7 処方及び分量を「続漢方百話」の「細野氏等の発表は処方量がないが、実際にたずねたところ新妻莊五郎師伝によって1回量を半夏……とし、大体2倍あるいはそれ以上を1日量として用いているとのことであった」から引用し、1回量の2倍を示す。

【注1】 又半夏湯、腹内左肋、痲癖硬急、気満不能食、胸背痛者方。

右九味、切、以水九升、煮取二升七合、去滓分温三服、如人行八九里久、忌猪羊肉錫苧菜等。

【注2】 慢性の胃障害があって、左季肋下部あるいは左乳房下部の疼痛、左の肩背にかけ凝り痛み、足冷えを訴えるものに用いる。すなわち胃下垂や胃アトニー症、胃潰瘍などのある弛緩性体質者で、腹力弱く、しばしば左の腹直筋が緊張または敏感である。体力的にもやや衰弱状態で、胃性神経症の傾向のあるものが多い。……以上の目標にしたがって胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃酸過多症、慢性膵臓炎などに用いられ、また肩こり症、神経症、胸痛、神経性食欲欠乏症(神仙勞)、善肌勞、貧血症などに応用される。

【注3】 私がこの方を肩こりに用いるようになったのは、S.34年3月の日本東洋医学会誌に、細野史郎氏が“延年半夏湯について”という貴重な研究を発表せられ、その指示にしたがって用いてみるに、顕著に奏効する例が多くそれ以来である。……私はこれらの記述によって、左の肩がこる患者で、仰臥または立位で心下部に圧痛を訴え、足が冷えるというものに、この方を用いることにしているが、これの服用によって頑固な肩こりが消散することをしばしば経験する。

【注4】 肩こりと胃の痛みを治す処方、その目標は梧竹樓方函口訣を要約すれば、左の季肋部に有形、無形のしこりがある上の方へしこって来て、項や肩がこわばり、みぞおちへさし込むような痛みがおこったり、胃内停水があって飲食物が心下部に停滞し、胸がつまるものである。

【注5】 慢性の胃障害があり、左季肋部あるいは左乳房下部の疼痛を訴え、左の肩背にかけて凝り痛むというものに用いる。

胃内および胸膈に停滞した水毒、ガス等によって凝結緊張疼痛を起こしたものを消散させるものと解釈されている。